

今、いちばん気になる統計は？

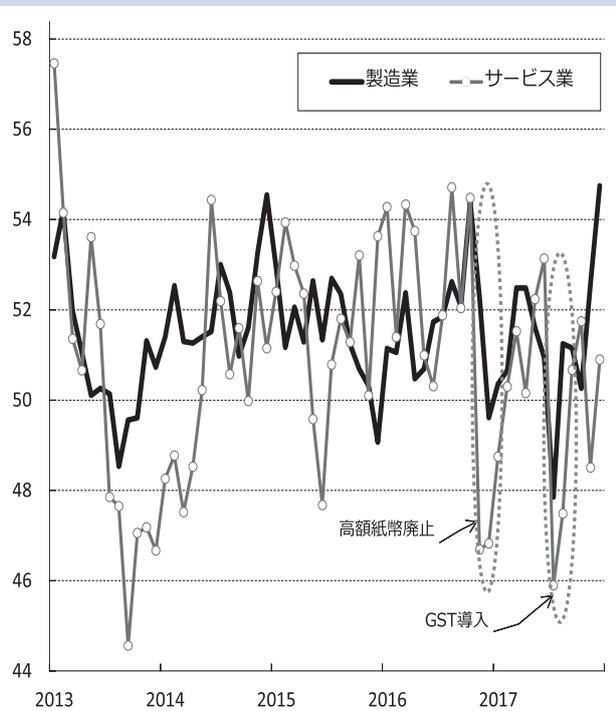
実態が掴みにくいインドの景気動向

インドでは、2015年にGDP統計に関する改定が行われ、主要国と同様に需要サイド(市場価格ベース)でGDP成長率が発表されている。

ただし、インドでは需要サイドの項目を推計する基礎統計が整備されておらず、政府が発表する数値の推計方法は事実上「ブラックボックス」になっているのが実情である。一方、元々社会主義国であったため、供給サイドの基礎統計は比較的整備されている。結果、準備銀行(中銀)は景気判断の材料に依然として供給サイドのGDP統計に当たるGVA(総付加価値)を使用している。

こうしたなか、英国の民間調査会社Markit社が発表する日経製造業・サービス業PMIは速報性に加え、企業を感じる景気動向を把握出来る。昨年は高額紙幣廃止やGST導入などで混乱したインド経済だが、その後の動きをみると、比較的早期にその影響を克服している様子が見えてくる。「巨象」の実像を把握するには、色々と経済指標の改善余地があるのも実情と言えよう。(経済調査部 西濱 徹)

資料 日経製造業・サービス業PMIの推移



(出所) Markitより第一生命経済研究所作成

編集後記

2018年は戌年。相場格言では「…申酉騒ぎ、戌笑い…」と言われる年。まさしく今年の大発会は大発会としての記録に残る大幅高となり市場関係者は一先ず笑顔からのスタートとなったようだ。

世界的な景気拡大、好調な企業収益、決して緊縮型ではない財政政策、マーケットフレンドリーな金融政策、と並べてみれば株が上がりたほうがいい環境が相当期間続いているのも事実。加えてTOPIXの高値1989年12月の2,884.80から安値2012年6月の695.51の半値戻しが1,790.15であり、90年代以降何度か届くもののなかなか抜けなかったTOPIX1800ポイントのレジスタンスラインもようやく抜けてきたこともあり大幅高に繋がったのだと思う。古くから「半値戻しは全値戻し」と言う。これから、にわか強気派が増えてくるような気がする。

思い返せば2017年は「申酉騒ぎ」の酉年であったが、マーケットでは目立った上下の動きはなかった。逆に近年まれに見るボラティリティの小さな年だったと言える。決して材料がなかったわけではないが、市場の中で議論され小刻みに売買が繰り返されるうちに織込まれてしまったようで流れを変えることはなかった。この欄で何度か書いているが、古くからNYウォール街に「大相場は絶望と悲観の中で生まれ、懐疑と共に育ち、楽観の中で天井をつけ、幸福感と共に消えていく」という格言がある。マーケットは常に悪材料、リスク要因を探しているほうが健全だし長続きするということが果たして今のマーケットは「懐疑」の中にいるのか?「楽観」の中にいるのか? (2018/1/5記 H.S)

○第一生命経済研レポートに関するご意見・ご要望は、keizai@dlri.dai-ichi-life.co.jpまでお寄せ下さい。

○本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。